

桜蔭俳話会 七月句会 (第三五七回)

平成二十九年七月二十三日(日)

会場・旭区民俗文化センター(サンハート)

推薦の句

万緑の底に壊れし村ひとつ

明美

理由…「万緑の底に吾子の齒生え染むる」の名句がある。上五は元の句と同じであるが、元句と別の情趣が醸し出されている。

委員長全て包みてサングラス かほる

理由…サングラスの句として新しさがある。

「委員長すべて呑み込みサングラス」としてもよい。

羅や訪はねば足らぬ用一つ 幸

理由…古典的な句立てであるが、季語が効いている。

工作船の弾痕あまたはたかみ ヤエ子

理由…既視感のある句であるが、季語が働いている。

マシーンに慣れし筋肉夏旺ん かほる

理由…季語が効いている。アスレチックジムの有り様が出ている。

夏の夜やアニマルホルダーの館 かほる

理由…「アニマルホルダー」とは、新しい句材である。これを俳句に取り入れようとす  
る姿勢に感ずる。

添削の句

原句…卒寿過ぎのラジオ体操アロハシャツ

ヤエ子

添削案…ラジオ体操卒寿過ぎたるアロハシ  
ヤツ

理由…卒寿過ぎた人がアロハシャツで参加していることに着目したのであれば、「卒寿過ぎ」を「アロハシャツ」にダイレクトに接続させる。

原句は「」音構成に拘っているが、上五部分は例外として八音まで許されるので、「ラジオ体操」を前に持って来ればよい。

原句…黒揚羽消えていつもの壇ノ浦  
才美

添削案…黒揚羽消えてしまひし壇ノ浦

理由…壇ノ浦は源平の決戦があったところ。平氏の家紋は揚羽蝶であるから、句意は自  
ずと明らかである。良く出来た句である。

しかし、ここで問題となるのは「いつもの」という言葉である。この言葉が使えるのは、作者が頻繁に現地を訪れ、壇ノ浦の「いつもの」の状態を把握していることが前提となる。このような論難に対抗するには不用意な表現は使わない方がよい。

原句…梅雨出水ひとの命の分岐点  
明美

添削案…梅雨出水ひとそれぞれの分岐点

理由…良く出来た句であるが、「命の分岐点」という表現には既視感がある。

原句…遠流地の砂に足跡浜えんどう  
才美

添削案…浜えんどう遠流の島の足の跡  
理由…「砂」の言葉は、「浜えんどう」と重なるので省略できる。「遠流地」の言い方が、しつくり来ない。

原句…祭果て闇に滲みゆく名残笛 才美

添削案…夏祭闇に滲みゆく名残笛

理由：「果」と「名残」が重なる。

真壽

原句：洪水のあとの渴水日日草 明美

添削案：検診の数値の上下夏の蝶  
理由：名詞に「す」を付けると動詞になるが、「す」はなるべく使わない。

添削案：洪水のあとのしづかさ日日草

理由：洪水と渴水では分かり過ぎる。

原句：家ひとつ木屑に変へし梅雨出水

原句：炎昼や元気シニアのバスの列  
ヤエ子

明美

添削案：炎昼やシニアはつらつ停留所

理由：家ひとつ木屑に変はり雲の峰  
理由：「バスの列」が、バスの車体の列なのか、バス停にバスを待っている人の列なのか、少し不明！

原句：竹林の揺れる木洩れ日夏の蝶

原句：炎昼や路面いつばいチョークの絵

友子

才美

理由：竹林の揺れる木洩れ日梅雨の蝶  
理由：梅雨の蝶は低く飛ぶ。

添削案：炎昼や君は路面のチョーク絵師  
理由：路面いつばいのいたずら書きする子供を、絵師に見立てるのも面白い。

原句：木洩れ日の菩薩や祈る婆の汗

添削案：木洩れ日の菩薩や祈りの玉の汗

原句：絵はがきの山伏羽黒花祭 かほる

理由：婆はできるだけ使わない。

添削案：先導の山伏四人祭かな

原句： 体内の水の減りゆく大暑かな  
明美

理由：絵葉書や絵、写真にある風景や人物、事物を俳句の題材にしない。実景として羽黒花祭なるものが行われていたのであれば止むを得ないが、花祭は本来、春の季語。この違和感を解消するには、「山伏四人祭かな」とすることも出来る。山伏の羽黒では、いわゆる観光地の絵葉書俳句になる。

理由：理由の説明はしない。

原句：一人だけ違ふお返事青ぶだう

添削案：一人だけ違ふ返事や青ぶだう

原句：夏草や毎朝ビール飲む老夫

理由：丁寧語の「お」は使わない。

真壽

原句：涼風や不眠の脳を一撃す

添削案：毎朝のビール一本籠の草

理由：涼風や不眠の脳を一撃す

理由：夏草もビールも夏の季語。草にまつわる季語性を消す。「老夫」、「老妻」、「婆」、「爺」の使用は極力避ける。

友子

原句：金時山の婆の味噌汁梅雨明くる

理由：「一撃」の言葉が強いと言うか、まだ

友子

使いこなしていない。

添削案：金時山の味噌汁の鍋梅雨明くる

原句：健診の数値上下す夏の蝶

友子

原句：健診の数値上下す夏の蝶

添削案：金時山の味噌汁の鍋梅雨明くる

理由…金時山の看板娘が加齢によって、婆  
になったから、「婆」を使いたいとの気持は  
分かるが、「梅雨に入る」でも「梅雨晴間」、  
「梅雨旱」でも句が出来ることになる。要  
するに季語が効いていないことになる。

原句…日盛りは鳩も木陰に群れ休む  
真壽

添削案…日盛や鳩は木陰に餌を探す  
理由…並列の「も」は極力使わない。日盛り  
だから休むという、原因結果の句にしない。

原句…玻璃から落ち我に目を剥く守宮かな  
ヤエ子

添削案…窓ガラス落ちて目を剥く守宮かな  
理由…玻璃だけでは、玻璃の花器の可能性  
もあり、ガラス窓まで誘導することができ  
ない。

原句…引越しや往復五回梅雨晴間  
かほる

添削案…引越の往復五回梅雨晴間  
理由…強い切れ字の「や」は安易に使わない。

原句…風鈴や父の遺品の数多し  
友子

添削案…数多なる父の遺品や夜風鈴

千人の祈雨の高校記念祭                   かほる

添削案…千人の喜雨高校の設立日

理由…記念祭は文化祭の一種として秋の季  
語か。

（文責 代表 増田守 欠席

投句 古野明美、稲葉幸）